

—海流によって隔絶された八丈島の歴史—

万次郎ら5人が「黒瀬川」と呼ばれる黒潮本流に乗って、天保12年(1841)1月7日に足摺岬沖から漂流したことは、『漂異紀畧』『漂客談奇』等の文献にも記され、これまで「市史編さん便り」にも度々紹介し、皆さんはご承知のことと思う。今回は、武光誠『日本地図から歴史を読む方法』(河出書房新社、1998年)の195～200頁に記述されている「海流によって隔絶された八丈島の歴史」を引用し、「八丈島の歴史」にスポットを当てて記述することにする。その際に、土佐清水市との海流を通じた関係性についても若干ではあるが触れてみたい。

(1)伊豆七島から小笠原諸島までの位置関係

1月8日室戸岬沖、1月9日紀州沖と流され、その後10年に1度発生すると言われる黒潮の大蛇行によって鳥島に流された。まず島々の位置関係をここで整理しておきたい。伊豆半島の西側に位置する伊豆大島を北端とし、利島、新島、神津島、三宅島、三倉島、八丈島などの島々をまとめて「伊豆七島」と呼ぶ。その南端の八丈島は東京都から約300kmの位置にある。更に南に青ヶ島、須美寿島、鳥島などがあり、小笠原諸島の父島・母島が続く(右図参照)。図にはないが、小笠原諸島の最南端は、南硫黄島である。その南は、ミクロネシアのマリアナ諸島となる。日本の最南端は、沖ノ鳥島でマリアナ諸島の北端パハロス島とほぼ同じ北緯20度に位置している。

(2)足摺岬沖周辺での遭難は、万次郎ら以前から多発していた

延享2年(1745)12月26日、紀州国出身の船頭伝六が窪津浦でクジラの骨槽を買い付け、これを清水浦に停泊するイサバ船まで運送するように地元清水浦在住の廻船商人・藤五右衛門に依頼した。彼は半島沿いに足摺岬を回り、清水浦まで依頼された商品を運搬しようとした。臼碇沖合で輸送船が難破・漂流し、このとき八丈島まで流された。この詳細については、『土佐国群書類従』巻78所収の「八丈島漂渡記」(清水浦分一役・池則満が記述したと伝えられる)に記載されている。このとき乗船漂流したのは、藤五右衛門ら2人と紀州人2人の計4人であった。八丈島に翌年1月3日に漂着し、結局、藤五右衛門らが、江戸を経て、清水浦に帰着したのは7ヶ月後の8月30日であった。このように足摺岬周辺の海域は潮流が速く、海路上極めて危険な海域であった。



図 伊豆諸島・小笠原諸島

(3) 八丈島と他の伊豆七島の違い

八丈島は、黒潮の関係から伊豆七島の他の島と異なる歴史をたどることになった。

足摺岬沖から室戸沖、紀州沖へと流れる黒潮は、伊豆七島の付近では二筋の流れとなる。(1)一本は御蔵島の北方を、(2)もう一本は御蔵島と八丈島の間を流れた。江戸時代の人たちは(1)を「海暗(かいおん)」、(2)を「黒瀬川(くろせがわ)」と呼んだ。いずれも黒の字が付けられ、黒潮の黒っぽい色にちなんで名付けられた。

黒瀬川は、海暗と比較してはるかに激流で強かった。船乗りたちはこれを非常に恐れた。ゆえに八丈島に渡ることは容易ではなく、これが本土と八丈島との交流ができにくかった理由である。そのため八丈島の発展が、伊豆七島の他の島々と比較して遅れた大きな原因である。



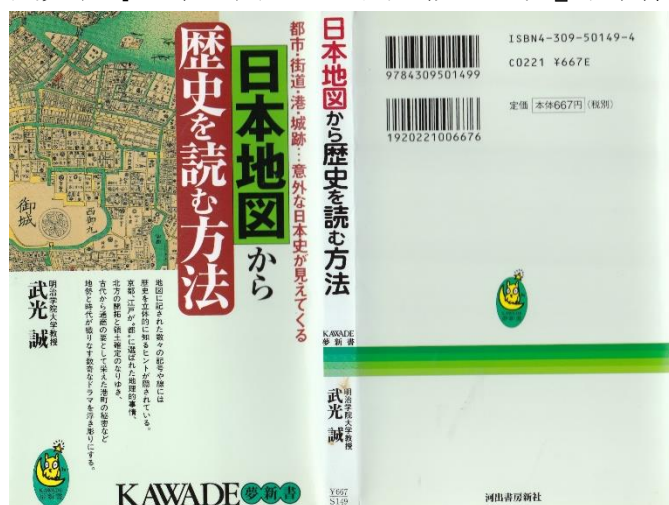
(4) 八丈島へ流刑となった宇喜多秀家

備前・美作の太守・宇喜多秀家は、豊臣政権下で五大老の一人となり活躍したが、関ヶ原で西軍に組みし、結果的に徳川幕府により、八丈島へ流罪となった。34歳で流罪となり、83歳で死去するまで八丈島で生活した。江戸時代は、江戸から遠く、手前に黒瀬川の激流が走っていることから、「鳥の通わぬ八丈島」と言われ、恐れられた。将軍に糞をかけたカラスが捕まり、八丈島送りになったというエピソードがある。このカラスは島につくとどこかへ飛び去ったという(笑)。

北方領土の探検で知られる近藤重蔵の子・富蔵も、江戸で殺人をした罪で八丈島に流罪となった。彼は、『八丈実記』を記した。この記録は、現在、島の歴史を探るための重要文献となっている。

引用・参考文献

武光誠『日本地図から歴史を読む方法』河出書房新社、1998年、208p。



著者紹介

≪武光誠 1950年山口県生まれ≫

東京大学文学部国史学科卒業
同大学大学院博士課程修了

専攻は日本古代史、歴史哲学。